7）牛の好酸球性皮膚炎の一例

立川　文雄
（ゆふいん動物病院）

【背　景】

アレルギー性疾患はヒトや小動物で発症例が多いことから研究、解明が進んでいる。産業動物ではアレルギー疾患は少なく症例数も少ないため解明に至っていない。今回好酸球性皮膚炎の一例に遭遇したのでその概要を報告する。

【症　例】

症例は黒毛和種 4 か月齢の雌で、同月齢の雌 2 頭の黒毛和種と飼育されており、畜主によると患畜は 3 日前より皮膚に異常がみられ掻痒感なく腫瘤、結節がみられた。また、全身症状はみられなかった。発病には節足動物が考えられているが、発生農家ではサシバエ、ウシアブ、アシマダラブユ、ショクヒヒゼンダニ、牛毛包虫、蚊が観察されている。

症状：第 3 病日、両側頸部から両前肢、前肩、背側、陰部周辺と内股に病変 1cm から 5cm 大の結節、腫瘤がみられ腫瘤の中心から針で突いたような傷があり漿液の分泌をみる。発病 8 日目より背側、陰部周辺と内股に脱毛や潰瘍症状と変化する病変がみられた。

治療経過：第 3 病日腫瘤を蕁麻疹と診断しパテント酸カルシュウムを含む合剤 10 日間、第 11 病日から 6 日間マレイン酸クロルフェラミンを含む合剤を投与。第 12 病日からプレトニゾロン 10 日間経口投与し、その後 5 日間で減量したが腫瘤寛解できずイベルメクチン投与、その後 14 日目消失した。

血液検査では赤血球の上昇がみられた。また、白血球百分比では好酸球は正常範囲であった。生化学検査では、発病初期に肝機能酵素の上昇がみられたが全身症はみられなかった。

腫瘤部分の被毛を引き抜くと腫瘤表皮の角化が進んでおり被毛を含む角化組織が剝がれた。

細胞診、皮膚病変部の細胞診では顆粒が多くみられ散在していた。肥満細胞腫も疑われたためトルイジンブルー染色を実施した。肥満細胞の増殖はみられなかった。

病理検査：表皮から真皮にかけ炎症性細胞と好酸球の浸潤がみられ血管周囲に好酸球の浸潤がみられた。

【考察およびまとめ】

好酸球性皮膚炎は昆虫の刺創や免疫疾患,薬疹などによるアレルギー反応で発病することが知られている。患畜では病理検査より好酸球性皮膚炎と診断されたが原因究明に至っていない。患畜の母牛は過去に毛包虫症で治療した経緯があったため母子感染を疑いイベルメクチンを 1 回投与した。その後 14 日間で腫瘤の消失がみられたことから、原因としてあらゆる節足動物可能性の考慮が必要と考えられた。